

1 目指す言語能力

文章構成や展開を工夫して文章を書く力をつけるとともに、ものの見方や考え方を深める力をつける。

【 指導事項 書くこと 】

(新)

- ア 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。
- イ 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。

【 言語活動例 】

- ア 関心のある事柄について批評する文章を書くこと。

2 単元名

新聞を生かしてコラムを書こう（自主教材）

3 生徒の実態

1) 「学習日誌」について

生徒には、1年の頃より「学習日誌」を活用させてきた。「学習日誌」には、毎時間の授業の振り返りを書かせるとともに、単元全体の学習を振り返えらせ、俯瞰的に学習をとらえさせるようにしている。また、「学習用語」として、授業で得た用語を記録させ、学んだ事柄が、次の学習に生かされるように意識化させている。この「学習日誌」を使用しだした目的は、本校研究で目指すところの「かかわり」を意識化させられるのではないかと考えたからである。ペーパーテストや授業中のやりとりや表情だけでは捉えられない思考や感性などを浮き彫りにできるのではないかと考え3年間利用している。

2) これまでの新聞を生かした学習から

生徒は3学年になってから、『新聞を生かして「思考力」「判断力」「表現力」を鍛えよう』という構想のもとで、いくつかの学習を行ってきた。

具体的には、教科書教材「新聞の特徴を生かして書こう—情報を発信する—」（光村図書3年）を使用して次の4つの学習を行った。

- ① 新聞の構成を学ぶ学習。
- ② 教科書に掲載されているトップ記事2つを比較して書き手（記者）の意図を読み取る学習。
- ③ ②の発展として、新聞10社（スポーツ新聞を4社含む）のワールドカップでの日本とデンマーク戦の結果を伝える記事（6月26日付け）を比較読みして、記者の意図や解釈を考える授業。
- ④ ①～③を生かして、「夏休みの出来事」を第三者（記者）になって書く授業。その後、小グループで読み合い評価。

これらの授業のうち①～③までの学習後の感想を「学習日誌」の記述から以下に紹介する（下線部；指導者）。

- ・今回の授業で新聞を読みとる技術と比較する技術が身についた。読み取る技術のおかげでいそがしいときにもリード文だけよめば何となくわかります。そして比較することによって得た情報を吟味して正しい情報に近づけることもできるようになりました。この授業を通して基本的な生活に必要なことを身に付けることができたので、今後これを生かしたいです。（4組・女子）
- ・…分けるキーワードはいくつもあるので視野を広くして視点をおくことが必要だと感じた。これからは新聞を読むことが多くなるので、いろいろなところに興味を持つことが大切だと思った。

(4組・男子)

・今回の新聞を比較する授業を振り返ってみるとメディアの扱い方などについて多くそして大きな事を学習することができたと思う。出版している会社ごとに書かれている記事の視点・内容が違うというのは、全く他の分野においても言えることだと思っのでしっかり覚えておき、これからの生活に使っていきたい。また、新聞の表現でこれは使えるなど感じたものがあつたので文章を書く時に有効利用していきたい。

(4組・男子)

・いろいろな新聞を読み人生で初めて同じ日時の新聞をたくさん読めて、小学校のころから「新聞」は「読んでもためにならない、つまらないもの」と考えていたけど、記事はおもしろくて家でも少し新聞に目を通すようになったのがよかったと思う。

(4組・男子)

・私の家は新聞を2社とっているが、記事の比較などはしたことがなかった。また、スポーツ紙は読まないの、見出しの色について発見することができ、深めることができたと思う。実習の先生が教えて下さった「メディア社会を生きる」についての平行として記事の読み取り方というものを今回の授業で生かすことができたと思った。同じ記事でも、その時の時間や筆者の考えが少し違うだけで、だいぶ内容が変わってくることに驚いた。読み手がしっかりと読み取らなければならないと改めて深く考えることができた。家でも2社の新聞を比較していき、一面は必ず読んで、これからの自分が書く文章の表現の仕方を工夫していけたらな一と思った。

(4組・女子)

5人の単元後の感想を紹介したが、新聞の一面を比較することで多くのことを学ぶことができたようだ。波線部の感想は主に思考に関する記述。二重波線部は表現に関する記述が見て取れる箇所である。一つの記事では深められないような発見や気づきを比較をとおして得られた様子が見られる。もちろんこれは全員の生徒が共有した感想ではないが、大なり小なり新聞記事を使った学習が生徒のものの見方や考え方に与えた影響を見て取ることができた。なお、指導者が「学習日誌」のコメントを分析した中では、36名提出中(対象クラスの在籍数は39名)、気づきや発見など深まりの見て取れる記述が書かれていた生徒は、12名(全体の34%)である。

次に④の学習後の感想を紹介する(下線部;指導者)。

・今回の学習で学んだことは、文章って「自分」だなあ!!ということ。なるべく客観的に書こうとしても、「こう伝えたい」「こう見せたい」という気持ちがどうしても出てしまった。本当に「客観的」な文章がいかにか難しいかが分かった。メディアによって、観点が違うというのもよくわかる。この「自分」が出る文章で自己表現することは簡単だけれど、それが他人に思いやりのある文という、そうでもないんだなあと感じた。これからは、自分だけではなく、読んでくれる人に感謝しつつも思いやりのある文を心がけていきたいなと考えた学びだった。

(4組・女子)

・新聞を読むということはしてきたけれど、書いたことはあまりない…ということも報道委員会の僕にはありません。が、しかしこうやって文章の形を気にしてやっているほど、いつもこんなに大変だっけと思うほど、奥深く難しいものでした。新聞特徴として「簡単に分かりやすく情報を伝える」というのは分かるようで分からない、そんな感じでした。簡単にしすぎはだめ…でも加えすぎるとだめ…というのは本当に難しいものでした。前に国語の授業でやった「要約」というものにも関係してくるかなと思います。ただ、客観的に伝えるということは今回でかなりマスターしたので、日頃、特に報道委員会などでは、そのスキルを生かしていきたいです。

(4組・男子)

・新聞作りは様々な教科でやったことがあるが、今回が1番たくさんすることを注意して本格的な新聞になったと思う。一番苦勞したことは客観的に書きつつ5W1Hを中心とした多くの情報をつけなければいけないことだった。また、興味が引くようにするためにレタリングなどにも工夫を凝らすのが大変だった。でも、それだからこそ総合的な力がついたし、納得のいく作品になったと思う。

(4組・男子)

3人の単元後の感想を紹介した。生徒には、新聞を見出しやリード文、本文、キャプションなどに分けて文章を書かせた。そこでは、事実と意見を区別して書くことと、自分自身が経験したことを第3者(自分を記者に見立てる)として書くことをポイントとした。波線部の発言からも、客観と主観の区別が難しいことや読み手を意識した文章を書くことの大切さ、要約の学習時に学んだこととの関連性などに気づいている様子が見られる。

3) 論理の展開・表現に関する授業の取り組みについて

これまでに、論理の展開や表現について生徒が学んできた主立った授業は以下の通りである(表)。
 <構成に関わる授業一覧表(ただし、評価の%は学年(157名)全体の割合)>

年次	領域	活動等	評価の観点〔上段〕 ・ 評価(%)〔下段〕		
			形式	内容	文章量
1年前期	B	① 評論文	A(69)B(23)C(8)	A(70)B(23)C(7)	A(81)B(13)C(6)
1年後期	B	② 論説文	A(54)B(42)C(4)	A(40)B(51)C(9)	A(66)B(27)C(7)
2年前期	A	③ スピーチ原稿	A(20)B(76)C(4)		
	B	④ 随筆文	A(69)B(29)C(2)		
2年後期	C	⑤ 比較読み	A(37)B(58)C(5)		
3年前期	B	⑥ 評論文	A(74)B(23)C(3)	A(49)B(48)C(3)	A(76)B(22)C(2)

詳細は省くが、今回の授業に関わって、①(上記表の活動等の番号;以下同じ)と③と⑥について述べたい。

①の評論文の授業では、討論の授業の最後に、学習のまとめとして書かせたものである。そこでは、主張の形と反論の形、および引用の仕方、仮定文の作り方を指導した。主張・反論の形はそれぞれ、最初に結論を述べ、その後に理由(や根拠)を述べるようにさせた。その中で、論が説得力あるものであるかどうかを評価した。形式については、69%の生徒が、これらの形を用いることができた。Bのほぼ達成できた生徒を含むと、92%の生徒が、与えられた形式の中で、自分の論を展開できたことになる。内容についても70%の生徒が、A評価である。

③のスピーチの授業では、スピーチ原稿をもとに論理の学習を行った。そこでは主張(結論)と根拠とそれを支える説明の関係を捉えさせて、自分の意見を述べる授業を行った。例を出しながら、論の整合性や飛躍についても触れ、論理的に表現することについて学習したが、論証が説得力の高いものにはならず、結果、A評価が20%であった。相手を説得できるように自分の主張を組み立てる根拠をしっかりと述べられるようにさせるためには、まだ指導不足であると感じた授業であった。

⑥の授業については、教科書教材「握手」(光村図書3年)の学習後(討論を含む)に、書かせた評論文である。ただし、1年の時の評論文とは違い、指導者側が形式を全て与えるのではなく、プロットを立てて書くようにという指示以外は出さなかった。内容面では、他の人の発言を引用したままで、その引用文を分類し直したり、分析したりせずにただ述べている生徒が多くいたため、A評価は49%にとどまった。しかし、構成面に関しては、③で述べた、論の整合性や飛躍といった面では弱い面があっ

たものの、結論の文がそれぞれのプロットの文章ごとに書かれており、結論を読み手に分かりやすく伝えようとする傾向があり、A評価は74%になった。また、詳細は分析できていないが、読んでいて尾括弧で結論を述べている傾向が多く見られた。

4) 生徒の実態と本授業のかかわり

1年時からの論理に関わる学習や、3年時の新聞を活用した授業を通して、生徒の中に学習内容同士や日常生活などと関連付けるなど、考えが深まったり、広がったりしている人もでてきている。新聞を生かした学習では、多くの記事を比較することで、一つの記事では気づけない視点を手に入れる事も経験した生徒もいる。また、教材と教材の学習内容や活動が関連して、生徒の思考の変容に役立っている様子が見られる。

しかし、論理的に物事を捉えたり、表現したりする面では、まだまだ指導がたりないと痛感している。

言うまでもなく国語科はスパイラル的な学習によって知識の習得や思考の深まり、技術の活用力を高めていく面が強い。その点で考えると、これまでの論理に関わる授業、また新聞を使った授業が、本授業で目指す言語能力の育成にどう関わっていくのかが楽しみである。

4 単元について

1) 単元設定の理由

まず、「新聞をいかして」とはどういうことかを説明しておく。新聞は、NIE教育の幅広い実践に見られるように、生徒の思考力や判断力、表現力を高めていくのに有効である。それは、私自身、前期に行った新聞を扱った授業からも実感として受け止めている。新聞は多くの事実と解釈から成り立っている。また、いろいろな様式の文章がある。生徒は新聞記事などから自分自身で思考し、判断する機会を得られるであろう。新聞から学び取れることは多い。また、各家庭で購読している可能性が高く、手軽に目にすることができる。これらの理由から本授業では、新聞を利用した単元を構成した。

次に、本授業の構想について説明する。本授業は、次の3つの力を育成したいという構想のもとに設定している。

- ① PISA 型読解力に代表されるグローバリズム（世界標準）な読解力と関連付けて、日本的な読解力の特殊性と有用性を認識し、活用する力の育成。
- ② 目的や相手に応じてどのような文章を書くべきかを判断する力の育成。
- ③ 記事同士や記事と自分の経験や伝聞などを関連付けて考える力の育成。

「①『PISA 型読解力に対応したグローバリズム（世界標準）な読解力』については、PISA 型読解力の特徴として「情報の取り出し」・「理解・評価」（解釈・熟考）・「活用」。また、内容だけではなく構造や形式・表現法なども評価の対象になっていることが挙げられる（「連続型・非連続型テキスト」はここでは触れない）。

新指導要領解説では、「書くこと」の「イ記述に関する指導事項」の中で「『論理の展開』としては、初めに意見を述べ、それを裏付ける事実を示し、自分の意見の正当性、妥当性を示す書き方、具体的事実から一般化し、自分の意見の正当性、妥当性へと結びつける書き方などがある。これらは、論理の展開を考える場合の基本となる組立て方とあってよい。このことを基本に据えて論理の展開を工夫することが大切である。」と記されている。「などがある」と表現されているが、例で示された書き方が「論理の展開を考える場合の基本となる組立て方」と述べられている。この「書くこと」の指導事項（記述）は、現行の指導案とはほぼ同じ内容になっている。本授業で扱う論理の構成の面で、これまでも指導要領で例示され、論理的に文章を書く指導のモデルが示されてきたが、PISA 型読解力の「内容だけでなく構造や形式・表現法なども評価の対象」といった面を受けて、これからますます指導要領に例示されたような構造や形式・表現法の指導は求められるであろう。

ところが、日本には起承転結といった論理の展開もあり、現在でも起承転結に沿った（あるいは変形として）文章を目にすることも多い。グローバリズムな視点から見ると起承転結のような論理の展開はどう

解釈すればよいのだろうか。誤解されては困るが、私も新指導要領解説にあるような論理の展開を否定しているわけではない。むしろ積極的に指導してきた。先ほど述べた「3生徒の実態 3）『論理』に関する授業の取り組みについて」で述べてきたとおりである。主張がはっきりしていて、しかも早い段階で何を伝えたいのかが分かる文章を書くことや話をすることは必要である。

一方で、起承転結に見られるような日本的な文章の書き方や話し方が基本ではないと言われるとしたら、はいそうですと素直には言えない。なぜなら、言語と思考は密接に関わっているという立場をとれば、日本語には日本語の論理の展開があり、そこから身に付けてきた日本語話者の思考があると考えられるからだ。それは、単純に日本語を覚えれば日本人の考え方が分かるわけではなく、逆に日本人が英語を覚えたから欧米的な思考が身につくわけでもないことから分かる。もちろん、だからこそグローバリズムな論理の展開を身に付けたからといって、日本的なものの見方や考え方がすぐに失われるわけではないだろう。しかし、グローバリズムな考え方が優位で、日本的な考え方・表現の仕方（これは日本語にかかわらずグローバリズムつまり英語、あるいは英語に近い言語ではない全ての言語に関わることだが）は、劣位であるという視点があるのであれば、それは日本語を考えたときに猶予すべき事態ではないだろうか。

そこで、本授業では、新指導要領に挙げられている論理の展開と日本的な論理の展開のどちらが優位・劣位ではなく、それぞれの特徴を知り、それぞれの持つ良さを考えられるようにさせたい。要はバランスである。グローバリズムな視点に立って、新指導要領で示されているような「記述」の指導は当然の事ながらしっかりと指導し、さらに日本的な表現の仕方も指導していくことが大切である。

「②目的や相手に応じてどのような文章を書くべきかを判断する力の育成」については、これまでに述べてきた考え方とリンクしている。先に「グローバリズムつまり英語」と書いたが、英語の文章が全て主張（結論）を一番先に書いて、その後主張（結論）を支える根拠や理由を書くかと言ったらそうではない（文の構成は主語一述語だが）。小説は小説の書かれ方がある。コラムのような書かれ方もある。先日、本校のAET教師（アメリカ出身）と話す機会があった。その中で、朝日新聞の天声人語の英訳を見せて、このような論理の展開があるが、筆者は何を言いたいかわかるかと問うたら、分かるかと述べていた。起承転結のような構成も、自分が学校で習った展開とは違うが、そういう展開もあるのだろうと理解を示していた。このAET教師とは別のアメリカ人の塾講師にも生徒を通じて論理の展開について聞いてもらった。二人の話に共通することはアメリカでは、小学校の頃から、型に当てはめて論理を表現する訓練を受けていることである。議論には議論の、論文には論文の、エッセイにはエッセイの形式を教えられるそうだ。

そこで大切なのは、議論の場では議論の場にふさわしく、論文には論文にふさわしい論理の展開や表現を使えるような技術を生徒に身に付けさせること。一方で、日本的な随筆や感想文、作文は日本的な論理の展開や表現を使える。といったような判断ができる力をもつ生徒を育てることであると考えた。その判断は日本人が得意としてきた空気を読むとか、気遣いとかいった「気の文化」につながるであろう。ちなみに、「日本的」と言う言葉も抽象的な言葉のため誤解を招きやすいと思うが、ここでは「伝える側の主張が表に出さず、受ける側の解釈に任せる」と定義しておく。

さて、「コラム」をなぜ使うのか？これまでに述べてきたようにグローバルな論理の展開・表現と日本的な論理の展開・表現は、それぞれに特徴があり、良さがある（もちろん不備な点もある）。新聞のコラムは、情報を伝える新聞の中にあって特異な文章である。文章の種類としてあえて位置づけるとすれば小説などの文章（国語科的言えば文学的な文章）と論説文などの文章（同じく説明的な文章）の間にあるのではないかと考えている。新聞は公共面の強いメディアであり、新聞社によっては何十万・何百万といった読み手が存在する。その中であって、小説でもなく事件を扱う記事とも違うコラムを使って、文章の論理の展開を考えたり、表現したりすることは日本語話者としての生徒の思考や判断力そして表現力の育成にも生かせるのではないかと考え、扱うことにした。いろいろな文章スタイルを意識的に学ばせることは目的や状況、相手によって文章スタイルを選択できる力の育成につながるであろう。

最後に、「③記事同士や記事と自分の経験や伝聞などを関連付けて考える力の育成」である。毎日豊富な記事が提供される新聞記事をもとにして、記事同士を関連付けて考えたり、記事と自分自身の経験や体験とを関連付けたりする学習は、生徒のもの見方や考え方を深めたり広げたりするのに有効であり、新聞は格好のテキストである。話材としての情報をたくさん持つことは、論理の展開を考え、表現する上でも大切になる。また、新指導要領の「書くこと」の「言語活動例（2）ア関心のある事柄について批評する文章を書くこと。」の解説にある「社会生活にかかわる様々な事物や出来事を考えること」の資料とし

て新聞が有効であること。さらに解説にある「…これを批評するためには、書き手の視野の広さや、論理的に物事を考える力が大切である。そのためには、関心のある事柄について、関連する事柄や背景などにも興味をもたせ、書き手の主観だけではなく、客観的、分析的に物事を見つめる姿勢をもたせることが必要である。」とある。「関連する事項や背景などにも興味をもたせ」ることは、本校の研究のかかわりと大きく関係している。本授業でもコラムを書かせる理由の一つとして、文章内容が、いろいろなことに関連付けられて書かれている視点があるからだということも付け加えておく。

以上述べてきた構想をもとに、本授業では目指すべき言語事項「文章構成や展開を工夫して文章を書く力をつけるとともに、ものの見方や考え方を深める力をつけ」られるように生徒に指導していきたい。

2) 言語活動を支える既習事項

生徒の実態に述べたため省略。

5 指導内容と教材のかかわり

1) 本指導計画において意識させたい「言語意識」

【 五つの言語意識 】

- ・相手意識；コラムを書く上で論理の展開や取材について考えている仲間に対して
- ・目的意識；論理の展開を工夫して書いたり、物事を関連づけて考えたりするために
- ・場面意識；少数グループや学級で話し合う場面で
- ・方法意識；コラムの構成や話題の扱い方などを考えたり、話し合ったりして
- ・評価意識；論理の構成を工夫したり、ものの見方や考え方を豊かにしたりすることができたか。

2) 学びの意欲を高めるための手だて

本単元では、「論理の展開」という学習の中で、全体研究で示す3つのかかわりの中で、特に「(1) 教科の学習内容同士の『かかわり』」と「(2) 教材の持つ学問の体系的な『かかわり』」が指導事項に大きくかかわってくる。

(1) 教科の学習内容同士の「かかわり」について

本授業では、「書くこと」の学習で、論理の展開について生徒に考えさせ、表現する学習を仕組む。これまでに生徒は、A領域の学習では主張（結論）—根拠—前提（データ）といった構成。また、主張をスピーチのどの位置で述べるのが聞き手にとって一番分かりやすいか（親切か）を考えさせ、頭括型・尾括型・双括型を学ばせている。あるいは、飛躍や論の整合性、隠された前提などについても言及している。これらの学習内容は、単にA領域の学習にとどまらず、今回のB領域にも直接関わってくる学習事項である。この学習事項はC領域においても説明的な文章の読解にもかかわっている。その他にも、C領域の学習では、文章内容を形式段落の抽象度をもとにランク付けして文章を読解する方法などを生徒には学ばせており、これらが本授業にて、コラムの論理構成を考える上で、かかわってくると考えられる。

(2) 教材の持つ学問の体系的な「かかわり」について

1年時の前期に行った「評論文を書こう」という授業では、評論文を書く上で、まず読み手に自分の考えを納得させられるように主張の型・反論の型を教えている。

これらは新指導要領解説に述べられているような、主張（結論）をまず最初に提示して、その後、根拠を上げさせていくという論理の展開になっている。また、読み手に分かりやすいように、双括型にして主張を述べるように指導した。他にも、引用の型として、例えば、教科書を引用するときにはページと行数を示し、カギ括弧を使うことや、仮定の型として「もし～だったら…」といった思考法についても言及

している。あるいは、論説文を書かせる授業では、問題提起や結論、具体と抽象といった文の組み立て方。帰納的な論理の展開と演繹的な論理の展開なども学ばせている。これらの既習の事項が、本授業の中にかされることを期待したい。

なお、「(3) 教材と日常事象との『かかわり』について」は、直接的にはかかわってこないかもしれないが、「学習日誌」の記述や、新聞を活用した授業のこれまでの学習から、気に止めていたことなど、日常事象とのかかわりが、課題となる記事の取材や選別の中に見いだされることが予想される。それらも生徒の書くコラムの中や「学習日誌」の記述に表出されることを期待したい。

6 日常の取り組み

論理的に考えたり、伝えたりするためには、習慣化が大切である。そのためには、取り立て授業だけでは難しく、日常の教師の意識や、言葉かけが大きく影響してくる。そこで、生徒には、日頃から次の3つの言葉かけを行っている。

- ①意見を言うときは、結論をまず先に言うこと（書くこと）。
- ②次に、そう考えた理由を述べること（書くこと）。
- ③他者の意見を聞いたときには、同じなのか違うのかだけではなく、なぜか？を考えること（書くこと）。

また、出来事に対して批評するためには、知識の積み重ねだけではなく、物事を関連付けて考える習慣を身に付けることが大切である。そのために、生徒に「学習日誌」を使用させ毎回の授業の内容や感想を書かせてきた。それは、生徒に、授業の流れをつかませたり、俯瞰的に学習内容や活動を捉えさせたりするためである。さらに、一つの授業単元を行っている期間に授業と直接関係なくても、気づいたり、考えたりしたことや、読んだ本、得た情報などを生徒には自由にメモさせている。これらの取り組みが物事を関連付けて考える基礎となると考えてる。

7 指導目標

- ◎読み手に自分の考えが伝わる文章になるように構成を工夫して書く。(Bーイ)
- 新聞記事を利用して、取材をくり返し自分の考えを深める。(Bーア)

8 指導計画（書くこと5／21時間）

一次…文章構成について考える。(2時間)

- 1・2時 新聞のコラムを利用して、文章構成について考える。(本時の授業；1時)

二次…課題を決め、新聞記事を利用して取材する。(帯単元・個別作業〔家庭学習〕)

三次…論理の展開を工夫してコラムを書く。(3時間)

- 1時 取材してきた記事などを関連付けて、考えをさらに深める。
- 2時 説得力のある文章になるように構成を工夫して書く。
- 3時 少人数でコラムを読み合い、意見交流をする。

※【 細案 】 別ページ「単元構成表」参照

9 本時の授業

- ① 日 時 平成22年10月23日(土) 11:05 ~ 11:55
- ② 場 所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 3年4組
- ③ 対 象 3年4組

- ④ ねらい ○主張を明確にしてコラムの構成を捉え直す。
○日本的なコラムの特徴や良い点を考える。
- ⑤ 展 開

	学習活動及び内容	指導上の留意点	評価
つかむ 3分	1 本時の目標を知る。 ・コラムを使って論理の展開について考える。 ・相手や目的によって論理の展開を工夫したり、使い分けることを学ぶ。	1 全員が目的を確認できるように集中して聞かせる。	1 観察(興味関心)
深める 4 2分	2 教材コラムをリライトして、論理の展開を考える。 作業① コラムを段落に分ける。 ② 主張(結論)が書かれている段落を考える。 ③ 主張(結論)の文は何かを考える。 ④ 主張からコラムのタイトルを付ける。 ⑤ 文(段落)の順番を入れ替えたり、削ったり、補足したりして分かりやすい論理の展開に直す(リライト)。 ⑥ 少人数グループでリライトしたコラムを読み合い評価する。 ⑦ 全体で確認する。 3 元のコラムと、リライトしたコラムを比較して日本のコラムの特徴を考える。 作業① 作業1の学習を振り返り、どちらが読み手にとって分かりやすい文章であったか考える。 ② 比較を通して日本のコラムの特徴や良さを考える。 ③ 全体で確認する。	2 テンポ良く発問や指示を出す。適宜机間巡視を行い、作業が進むように助言する。 必要に応じて作業の切れ間に全体で確認し合う。特に①～④は、全体で確認しながら進行する。 基本的には個人作業だが必要に応じて、少人数で意見交流をさせる。 3 元のコラムとリライトしたコラムの論理の展開を比較して、それぞれの特徴について考えさせる。	2 ○観察(興味関心) ・ワークシートの作業の様子 ・話し合いの様子 ○ワークシートの記述とリライト文 3 ○観察(興味関心) ・発言の様子 ○ワークシートの記述
一般化 5分	3 学習を振り返り感想を持つ。 「学習日誌」に本授業の反省を書く。	3 活動内容だけではなく、気づきや深まりなど思考の変容を具体的に書けるように助言する。	3 学習日誌の記述

- ⑥ 評価規準〔細案〕 別ページ「評価規準表」参照